

---

# 告白 ~伝えたい想い~

蒼井 空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

告白 ～伝えたい想い～

### 【Nコード】

N2001R

### 【作者名】

蒼井 空

### 【あらすじ】

クリスマスイブの日、俺こと佐山信二なやましんじは友人の妹である中条亜美なかしゅうあみちゃんに人生初めての告白をしようとするのだが！？

(前書き)

この話は、元々がネトラジ(ライブドア)で聴いていた声劇ラジオに投降した台本をさらに話を広げて小説として作り直した作品です。この作品を読んで、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

今日は、十二月二十四日のクリスマススイブ。

愛を深めあう恋人同士や、好きな相手に告白しようとする男女にとって最高のイベントであるこの日に、この俺、さやましんじ佐山信二が、俺の友人の妹である中条亜美ちゃんなかじょうあみと、駅前にある喫茶店で会う約束をしていた。

俺は喫茶店の中へと入り、窓際の席に座った。

「あと1時間か……。ちょっと、早く来すぎたかな」

俺はコーヒーを注文したあと、窓の外を眺めながら呟いた。

駅前の通りを行き来する人々は、今日がクリスマススイブという事もあって、腕を組んだり、手を繋いだりと、若いカップルがいつもより多く目についた。

(そういえば、亜美ちゃんと初めて会った時もイブの日だったよな。  
・・・)

俺は、二年前のクリスマススイブでの出来事を思い出していた。

二年前のクリスマススイブ……。

大学一年生だった俺は、数人の友人とゲーム・カラオケ・飲み会といった具合に楽しい時間を過ごし、それは深夜近くまで続いた。

帰りの方向が同じだった事もあり、酷く泥酔した友人の一人である中条隆を俺は家まで送る事となった。

隆の家の前まで来るとインターフォンを押し、家族の人に立っているのもやっとなほど酔っている隆の事をインターフォン越しに告

げる。

それから暫くして、玄関の扉が開き、中から出てきたのはピンクのパジャマ姿に白のカーディガンを羽織った可愛い女の子だった。

俺は、その女の子に一瞬で心を奪われていた。

その女の子というのが隆の妹であり、当時高校一年生の亜美ちゃんだった。

「今日こそは、ちゃんと告白しないと・・・」

俺は、亜美ちゃんへのクリスマスプレゼントを握りしめながら、自分にそう言い聞かせた。

緊張のせいで、時間の感覚がまったくつかめなくなっていた俺だったが、だからといって時計に目を向けるわけでもなく、コーヒーを飲んで窓の外を眺めるといった動作をひたすら繰り返していた。十二杯目となるコーヒーのおかわりを頼んでいた時、俺の告白相手である亜美ちゃんが、この喫茶店の中へ入って来るのが見えた。

亜美ちゃんは、白いボンで後ろ髪を結んだポニーテールの髪を左右に揺らして何度か店内を見回し、窓際の席に座っている俺の姿を見付けると小走りに駆け寄って来た。

「遅れてごめんなさい」

亜美ちゃんは、息を切らせながら頭を深深と下げて謝罪の言葉を放ち、俺の向かい側の席に座った。

俺が時計を見ると、待ち合わせの時間から二十分が過ぎていた。

亜美ちゃんを目の前にして、告白しなければ・・・という重圧がさらに俺の上のしかかる。

その為か、俺の胸の鼓動が外にまで聞こえてきそうなほど高鳴っていた。

「出かける時間になって、急にどんな服を着て行ったらいいのか迷ってしまって……。あつ、言い訳にしかならないですね。本当にごめんなさい」

俺は申し訳なそうに謝る亜美ちゃんを見て、より一層彼女が愛しく感じた。

「い、いや、別に謝らなくても平気だから。二十分なんて、待つてるうちに入らないしね。だから、全然大丈夫、全然気にしなくていいから」

「信二さんは、やさしいですね。家のお兄ちゃんだったら、絶対怒ってますよ」

亜美ちゃんの「やさしい」という言葉に、俺は思わず舞い上がりそうになってしまった。

「や、やさしいだなんて、そ、そんな事ないよ。で、でも、亜美ちゃんにそう言ってもらえるのは、凄く嬉しいな。え、えっと、きよ、今日は、クリスマススイブだっていうのに、亜美ちゃんは大事な約束とかあったと思うけど、それなのに無理に誘っちゃってごめんね」

「そ、そんな、無理になんて思っていないですよ。別に彼氏がいるわけでもないし、友達と約束があるわけでもないですから。それにわたし、信二さんと一緒にいると、とても楽しいんです。だから、何も気にしないで下さい」

そう言ってくれた亜美ちゃんの微笑みが、亜美ちゃんのやさしさが、臆病な俺の心に勇気を与えてくれた。

「あ、亜美ちゃん、と、突然だけど、だ、大事な話が・・・あるんだ・・・」

「え？ 大事な話って・・・な、何ですか？」

俺の緊張が伝わったのか、亜美ちゃんは背筋をピンと伸ばし、少し落ち着きのない様子で俯いたまま、俺の次なる言葉を待っているといった感じに見えた。

お互いが緊張しているせいか、何か張りつめた空気の中で、俺は心臓が飛び出しそうになるのを必至に抑えながら、意を決して言葉を放った。

「あ、亜美ちゃん！ お、俺、君と初めて会った時から、ず、ずっと好きでした！ だ、だから、お、俺の、妹になって下さい！」

次の瞬間、俺の左頬に激しい痛みが走った。

一瞬、何が起きたのか分からずその場に固まっていた俺だったが、走り去る彼女の後ろ姿を見つめながら、彼女に平手打ちをくらったんだということが理解出来た。

「俺は、バカだ・・・最低だよ・・・。妹になってくれ・・・なんて・・・」

俺は、ただ茫然としたままで、それ以上の言葉は出てこなかった・・・。

俺にとって、生まれて初めての告白は、こうして幕を閉じた。

\* \* \* \* \*

俺にとってクリスマスイブという日は、決して忘れる事の出来ない、苦い思い出となった。

大好きだった女の子への初めての告白、そして・・・初めての失恋・・・。

俺は、あの時のことを思い出す度に、自分が許せなくなっていた。

「何で、あんなことを・・・言ってしまったんだろう・・・。はあ・・・。いや、答えは分かっているさ。何せ俺は・・・妹好きだもんなあ・・・。」

イブの日から1週間が過ぎていたが、俺は毎日のように自問自答を繰り返している。

当然、あの一件以来、亜美ちゃんとは一度も会っていない。

俺の親友であり、亜美ちゃんの兄である隆に何度も電話して、亜美ちゃんの様子を聞くこととしたけど、電話をかけようとする度に、怖くなって聞くことが出来ないでいる。

「はあ・・・。まったく、俺ってやつは・・・。ほんと、情けないよな・・・。」

俺は部屋の窓から外を眺め、さらに大きく溜息をついた。

「やっぱり、このままじゃダメだ・・・。ダメだよな・・・。ダメなんだよ！」

自分自身を奮い立たせようと大声で叫び、ベットに投げ出されていた携帯電話を手に取った。

「今度こそ……今度こそ、隆に電話するぞ！」

俺は勢いよく、隆の携帯番号を打ち込んで通話ボタンを押した。隆は、俺からの電話を待っていたらしく、すぐに繋がった。

「信二か!？」

「あ、ああ……そうだよ」

「お前、何やってたんだよ！ 何度も電話したけど、全然繋がらねえじゃんかよ！」

「す、すまん……。怖くて、電話に出られなかったんだ……」

「怖いって……。なあ、いったい何があったのか説明してくれよ。イブの日に、亜美と何かあったんだろ？ その日、亜美のやつさ、ずっと部屋で泣いてたんだぜ。何があったのか理由を聞いても、何も話してくれねえんだよ」

俺は一瞬、心臓が止まる思いをした。

(亜美ちゃんが……。泣いていた……。ずっと、部屋で……。俺のせいだ……。俺のせいで……)

イブの日……。

俺は、あの時の光景を思い出していた……。

(何であの時……。何であんな事を……。その答えは、分かっている……。俺が……)

「おい、どうしたんだよ？ 早く説明してくれよ」

「あ、す、すまん、今から、ちゃんと説明するよ」

いつのまにか、また自問自答を繰り返していた俺は、隆の言葉で我に返り、あの日、クリスマスイブでの出来事を隆に話し始めた。

「マジかよ……。お前、バカだろ？ 告白で妹になってくれって、そんなのありえねえだろ？」

隆からの言葉は、俺の予想していたものだったが、実際言葉にされると胸を締め付けられるほどショックが大きかった。

「し、仕方ないだろ、生まれて初めての告白で……。緊張しすぎて……。お、思わず、あんなこと言っちゃまったんだから……」

俺は、この言葉が言い訳にすらならない事は分かっていた。

「はあ……。まあ、お前の趣味にとやかく言つつもりはないけどよ。もう少し、妄想と現実の違いってやつを理解しろよ」

「そ、そのくらい、分かってるよ」

「おいおい、分かってねえから、今みたいな状況になってるんだろ？」

「そ、それは……」

俺は、隆に対して何も言い返す事が出来なかった。

「まあ、とりあえず、今の状況は理解出来た。それで、これからお前はどうしたいんだよ？」

「どうしたいって、言われても・・・」

「じゃあ、聞くけどよ。お前は、亜美の事を妹にしたかったのか？それとも、彼女にしたかったのか？どっちなのか、はっきり答えてみる」

隆にそう言われて、俺は迷うことなく言葉を放った。

「俺は、亜美ちゃんを彼女にしたい！」

「なら、何にも迷うことなんかねえだろ？もう一度、亜美にそう言ってみようよ」

「・・・でも今さら・・・いや・・・このままじゃダメだ・・・。亜美ちゃんから、逃げてちゃダメなんだ！」

曇りきった俺の心に、一筋の光が差し込んだ気がした。

「ああ！俺言うよ！もう一度、亜美ちゃんに告白する！」

「よし！そうと決まれば、全は急げだ！信二！お前、今日家に来い！」

「な、何だって！きよ、今日！？」

「今日は、ちょうど朝から親が旅行で出かけてよ。今、家にいるのは俺と亜美の二人だけなんだわ。亜美は、お前との一件以来、部

屋に籠りがちになっちまってるからさ。お前の力で、何とかしてやってくれよ」

突然の隆からの要求に、一瞬戸惑った俺だったが、心の中では既にどうするかは決まっていた。

「ああ、分かった！ 今から、隆の家に行くよ！」

「おお、そうか！ なら、待ってるからな！ 早く来いよ！」

隆との話が終わったあと、急いで外出着に着替えた俺は、イブの日に渡すはずだった亜美ちゃんへのプレゼントを持って家を飛び出した。

そして、俺は自転車にまたがり、隆の家へと向かう。

(一分でも、一秒でも早く、亜美ちゃんに会いたい・・・)

俺は必至になって、自転車を走らせる。

隆の家の前まで来ると、急いで自転車を降り、インターフォンを押す。

すると、玄関から隆が出てきた。

「おお、早かったじゃねえか。亜美のやつは、今、部屋にいるぜ。俺はちよっくら、外でブラブラして来るからよ。あとの事は頼んだぜ」

そう言って、俺の右肩をポンツと叩き、隆は家を出ていった。

(ああ、隆、すべて俺に任せておいてくれ)

俺は、高ぶった気持ちを抑えるために、一度、深呼吸をしてから家の中へと入った。

隆の家には何度か遊びに来ていたので、俺は迷うことなく二階へと上がり、亜美ちゃんの部屋の前へとやって来た。

（心臓がドキドキする……。ここまで来ても、なお、ここから逃げ出したい衝動にかられるなんて……。何て臆病なんだ！俺は！）

亜美ちゃんの部屋を前にしてから、どの位の時間がたったのか俺には分からない。

部屋の扉を叩こうとしても、扉を叩く直前で腕が止まってしまう。そんな単純な動作を何度も繰り返し返した。

（くそ！俺は、こんなにヘタレなやつだったのか！勇気を出しやがれ！今、亜美ちゃんを悲しみの底から救えるのは、俺だけなんだ！）

俺は、一度大きく深呼吸したあと、意を決して扉を叩いた……。

「亜美ちゃん、俺、信二だけど……。突然、何で俺がここにいるのかって驚いたかもしれないけど……。君に、どうしても伝えたい事があって……。そのままでもいいから、俺の話聞いて欲しい……」

亜美ちゃんからの返事はない……。

それでも俺は、そのまま言葉を続けた。

「あの日、クリスマスイブの日……。俺は、亜美ちゃんを……傷つけるような事を言ってしまった……。妹になつて欲しいだな

んて……。ごめんね……。本当にごめん……。謝って、済む問題じゃないのは分かってる。こうして再び、君の前に姿を表すことも、いけない事なんだというのも分かってる。だけど、それでも……。それでも君に、どうしても、俺の本当の気持ちを伝えたい……」

俺は、もう一度深呼吸して、気持ちを落ち着かせたあと、亜美ちゃんへの想いを言葉に込めた。

「亜美ちゃん、好きです。初めて、君に会った時から、ずっと好きでした。だから……。だから、俺と付き合ってください！俺の彼女になって下さい！」

暫くの間、静寂な時が流れ……。

そして、静かにゆっくりと亜美ちゃんの部屋の扉が開いた……。

「本当に……。妹としてではなくて……。わたしを……。信二さんの彼女として、見てくれますか？」

消え入りそうな声で、亜美ちゃんは俺に問いかけた。

「うん、もちろんだとも！だから、亜美ちゃん、俺の彼女になってくれるかい？」

「はいっ」

亜美ちゃんは、微笑みながらそう答えると、目にはつつすらと涙を浮かべていた。

「亜美ちゃん、ありがとう……」

俺は、そつと彼女を抱きしめた・・・。  
もう二度と、亜美ちゃんを泣かせたりしない。  
そつ、心に刻みながら・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2001r/>

---

告白 ~伝えたい思い~

2011年10月8日19時51分発行